

南イタリアの洞窟教会における修復と保存について

関谷 倫寿

人間社会環境研究科 博士前期課程1年

1. はじめに

南イタリアはキリスト教文化研究の視点から見ても、東方からのギリシア正教とベネディクト修道会によるローマ・カトリックが混交し、イタロ・ビザンティン様式の美術を展開した地域で、洞窟教会の建築や壁画には美術史的にも多くの興味深いテーマを見出すことが出来る。とくに、アドリア海側のプーリア州では、東ローマ(ビザンティン)帝国でイコノクラスム(聖画像を偶像とみなした破壊活動)の嵐が吹き荒れた8-9世紀以降、多くの修道士たちが渡来し、カッパドキアにも似た凝灰岩質の渓谷や大地を彫りぬいて、多くの洞窟教会や修道院を建設した。しかし、それら中世の洞窟教会や修道院は歴史から忘れ去られ、荒廃し、無残な姿で残っている。洞窟教会などに描かれた中世壁画群は1960年代に一定の学術調査が実施されたとはいえ、歴史的文化財としての保存や復元の対象として注目されることのないまま消滅の危機を迎えていた。

去年と同様に、金沢大学フレスコ壁画研究センターが実施する南イタリア中世壁画群の調査プロジェクトに同行するが、その調査では、そのように危機的状況にある、プーリア州に散在する洞窟教会内に描かれた中世壁画の保存状態を日本製の最新の科学計測機器を使用して分析診断し、現状をデジタル・アーカイブに記録していく事を主な目的としている。

筆者は、去年、グラヴィーナ・イン・プーリアで後世に実施された修復(マッセッロ法)によって剥がされ、移築された教会壁画の調査に同行した。そこで、マッセッロ法はどのような方法で行われていたか、また、壁画の保存にどのような影響を与えているのかという点に注目して、各種データを収集することで分析・検討することを目的とした。その際に予備調査で訪れたポツジャルド市のサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会が今回の調査対象である。この教会壁画もグラ

ヴィーナ・イン・プーリアの教会と同様に、マッセッロ法で剥がされ、移築されている。今回は去年に引き続き上記の目的に加えて、アンケート調査、聞き取り調査も実施する。現在の修復理論では、壁画を剥がして保存するべきではないとされている。しかし実際に剥がされ、移築された壁画のある町の住民はどう考えているのかを明らかにしたい。

2. 調査日程・訪問先

筆者は2012年8月30日から9月30日にかけてイタリア南部に滞在し、プロジェクトの補助スタッフとして参加するとともに、各地の洞窟教会や博物館での調査、資料収集を行った。今回は、主にポツジャルド市にあるマッセッロ法によって壁画が移築されたサンタ・マリア・デッレ・アンジェリ教会と、その壁画が展示、保存されているアルド・モーロ博物館の調査について報告する。

サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会はポツジャルドの旧市街の中心に位置する。マトゥリチェ・ディ・サン・サルバトーレ教会近くの路上に設けられた電動式の蓋を開けると地下に降りる階段があらわれる。4本の角柱が支える内接ギリシア十字型プランをもつ三廊式の空間が広がる。この教会は1929年に下水道の工事の際に偶然発見され、発掘された。そして1955年に、カビや炭酸塩の脅威から守るために壁画が壁から剥がされローマ中央修復研究所に移された。修復後、イタリア各地で展覧会を開催し、現在は、1975年にポツジャルド市に新しくオープンしたアルド・モーロ博物館に展示、保存されている。壁画を剥がした後の地下教会は、道路下のため鉄筋コンクリートの梁で天井を補強し、1999年に、復元壁画のパネルが設置され、見学可能となっている。

3. 調査内容と結果

今回調査したサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会では、マッセッロ法によって壁画が移築されている。マッセッロ法は、フレスコ画の描かれた壁を、石やレンガを積み上げた壁体ごと適当な大きさのブロックに切り取り、鉄柵で締め、ひとつずつ移動させる方法である。建造物の崩壊や改築にともなう物理的な破壊からフレスコ画を守るために実施されたと考えられる。ヴァザーリによれば、この方法は16世紀にはすでに行われていた。しかし、このマッセッロ法についての詳しい資料は残っていない。今回の調査では、このマッセッロ法によって移築された、もとの洞窟教会と移築された博物館の壁画を比較することにより、その方法と保存の問題点を明らかにしたい。そのために、アルド・モーロ博物館の平面図を作成した。【図1】また、アルド・モーロ博物館にあるオリジナルの壁画とサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会のレプリカの測量を行った。サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会は整備されレプリカが展示されているため、去年調査したグラヴィーナ・イン・プーリアのサン・ヴィート・ヴェッキオ教会【図2】やパーデュレ・エテルノ教会【図3】のように、マッセッロ法あとの掘削痕を見ることができず、どのように剥がしていったのかを予測することは困難だった。しかし、その両教会に見られなかった特徴として、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会には柱があり、どのように剥がしたかをオリジナルの壁画の切り出し方から予測できる。さらに、この柱を切り出している瞬間の写真の場所がまさに柱なのである。【図4-1】サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会の写真と比べると一目瞭然である。【図4-2】オリジナルのアルド・モーロ博物館の写真も載せておく。【図4-3】

次に、記録と表面の凹凸の観察のために自然光と斜光線による写真撮影を行った。聖コスマスと聖ダミアンが描かれている壁画【図5】の凹凸が不自然であることに気づき、近づいて見ると、表面の顔料の破片が重なっており【図6】、明らかに修復の手が加わっていることが分かる。壁画を移築する前の写真を見てみると【図7】、柱に隠れている奥の壁画の横に大きく亀裂が入っているのがわかる。おそらく亀裂を境目にして二つのブロックでそれぞれ剥がし、後で一つに修復したのではないかと考えられる。

現在の修復理論では、壁画を移動して保存すること

表1 新たに地下洞窟教会が発見されたら現地で保存すべきか、剥がし移築して保存すべきか

	現地保存すべき	移築して保存すべき	計
ポッジアルド市民	33	7	40
観光客	27	5	32
計	60	12	72

は推奨されていない。その中で実際に移動、保存された壁画がある町の住民は、壁画の移動に関してどのように思っているのかを知るために、ポッジアルド市民と観光客を対象にアンケート調査、及び聞き取り調査をおこなった。測量や写真撮影の合間に、博物館の外で声をかけてアンケートに回答していただけるようお願いした。ポッジアルド市民40名、観光客32名、計72名分のアンケートを集めた。【表1】は、もし、新たに地下洞窟教会が発見されたら現地で保存すべきか、剥がし移築して保存すべきか、という質問に対しての回答をまとめたものである。

表1を見てわかるように、現地で保存すべきという意見が大多数を占めた。これは現在の修復理論から見ても当然の結果だと思われる。しかし、現地保存を選んだ人でも、半数以上が「現地で保存すべきだが、壁画が失われてしまうのであれば移築すべきだ」という意見を述べていた。絶対に現地で保存というわけではなく、第一に後世に残していくことが重要視されている、と感じた。

また、アンケートをする中で、実際に移築前の地下教会に入り壁画を見たという人に出会い、当時、住民は移築に賛成だったのかを聞いたところ、「梯子で地下に降りた。【図8】壁画には届いていなかったが、床には水が溜まっていたから、剥がして移動させることには賛成だった」と話してくれた。その後、資料収集をしていると、壁画が剥がされ、移動されたあとのサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会の写真を手に入れることができた。【図9】確認してみると、本当に床に水が溜まっており、壁画をそのままの状態では保存するのは極めて危険だったろうと考えられる。

4. 調査の成果と展望

今回の調査地のサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会は整備されレプリカが展示されていたため、マッセッロ法に関して考察することは難しかったが、唯一の特徴として柱に描かれた壁画があり、それをど

のように剥がして移動させるのかを考察できたことは一つの成果である。また、マッセッロ法に関する貴重な資料を手に入れることができたことも大きな成果である。特に、ポツジャルドの写真屋に残っていた写真はどれも大変貴重であると言える。【図8～12】これにより推測でしかなかったマッセッロ法の実態をより詳細に考察していくことが可能である。

アンケート調査によって、ポツジャルド市民や観光客(ヨーロッパ圏内)の方々の壁画の保存に関する考えを、絶対数は少ないとはいえ知ることができた。今後はその数を増やすとともに内容も充実させ、同じ様に壁画を剥がし移動させ保存している博物館のあるグラヴィーナ・イン・プーリアでもアンケートをとりたいと考えている。

今回の調査でも消滅しつつある洞窟教会壁画を見てきたが、そのような現状の中でどのような修復、保存方法をとっていけばよいのか。実際に壁画を剥がし、移動し、保存しているグラヴィーナ・イン・プーリアとポツジャルド市の洞窟教会や博物館のあり方や、そこに住む人々の壁画との関わり方から、壁画をどのように保存すべきなのかを考えていきたい。

謝辞

今回、研究を行うにあたり、宮下孝晴先生をはじめ、五十嵐心一先生、江藤望先生、大村雅章先生、真田茂先生、また、金沢大学フレスコ壁画研究センターの皆様には、現地での数多くのご指導だけでなく、生活の上でも大変お世話になりました。また、ポツジャルド市の調査においては、協力して調査を行ってくださった木村仁美さん、博物館と教会の管理をされていて、親切に私たちをサポートしてくださった Rino Greco 氏、プーリア州文化財監督局 Fulvia Rocco 様のご尽力のお陰で、調査を円滑に進めることができました。この場を借りて御礼を申し上げます。

参考文献

宮下孝晴／宮下睦代他著『2010年度金沢大学フレスコ壁画研究センター 研究調査レポート Vol.1』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2011

宮下孝晴／宮下睦代監修『2010年度 フレスコ画を剥がす フレスコ壁画保存のためのディスタック法実習報告書』金沢大学フレスコ壁画研究センター 2011

アレッサンドロ・コンティ著、岡田温一他訳『修復の鑑 交差する美学と歴史と思想』ありな書房 2002

高階秀爾監修『増補新装 【カラー版】西洋美術史』美術出版社 2002

Anacleto Vilei 著『Poggiardo GUIDA TURISTICA ILLUSTRATA』Arti Grafiche Guido 1991

Anacreto Virei 著『POGGIARDO UN PAESE NELLA STORIA E CIVILTA DEL SALENTO』CONGEDO EDITORE

G.Gabrieli 著『Inventario topografico e bibliografico delle cripte eremitiche pugliesi』Roma 1936

M.Luceri 著『La cripta di Santa Maria in Poggiardo(Lecce),in "Japigia", IV』1933

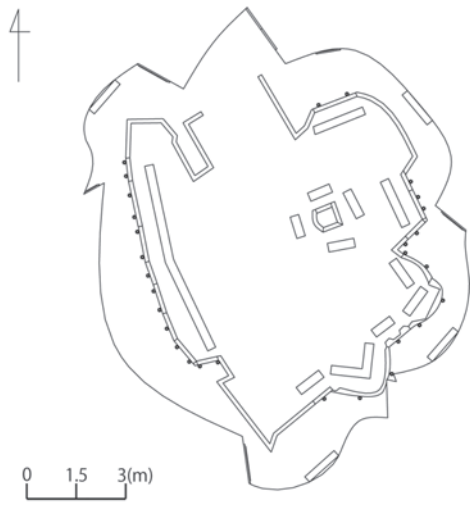


図1



図2



図3

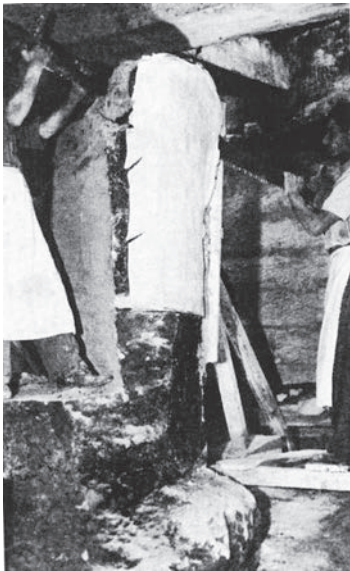


図4-1



図4-2



図4-3



图5



图6



图7



图8



图9



图10



図 11



図 12